

森の文化と環境教育

—12年目研修を終えて—

岐阜市立岩小学校 竹川 里佐子*

カリキュラム開発・社会科教育専修 野元 世紀

1 はじめに

ご承知のように、12年目研修は一つの研修テーマを設定し、それに基づいて自分で計画を立てて一年間研修を行っていくことになっており、キャリアアップフィールドはその一部である。12年目研修キャリアアップフィールド説明会の際、石川英志先生が「ここでは大学院レベルの講義を皆さんに受けていただきます。」と仰ったのをはっきりと覚えている。そして、実際に研修講座一覧を見てなるほど、と思った。というのも私が12年目研修の前年度の3月に、岐阜大学大学院教育学研究科教科教育専攻社会科専修の修士課程を修了したばかりであったからだ。(現職教員の14条大学院である。)

大学院では歴史学(特に日本史)を中心に研究した私の修士論文は、近代学校成立期の女子教育をテーマにしたものである。本来なら12年目研修のテーマも歴史学にするべきであったが、そのとき小学校3年生を受け持っていたという事情もあって、12年目研修のテーマを「生涯学習」とした。前年度までの2年間の大学院在学中、自分の専攻科はもちろん、他の専攻、他の大学院、学部の講義やゼミにまで出かけていっており、生涯かけて学ぶことの必要性和楽しさをつくづく実感したからである。以下はテーマ設定の際のレポートの一部である。

— 現在、子どもたちを取り巻く社会環境は、大きな転換期を迎えつつあり、とりわけ教育の世界においてはそれが顕著であるといえる。それに伴い教育に期待される役割もますます多様性を帯びてきていると言える。私が教員になってからのここ十数年をみただけでも、保護者の方の教育に対する思いや願いは、多種多様なものとなってきている。曰く「学習のことを徹底してやってほしい。」曰く「家庭ではとても躰切れないので学校でも躰をしてほしい。」曰く「行事的なことをたくさん行ってほしい。」こうした要望にすべて完璧に答えることは極めて困難であると思われるが、このような背景で、これからの教職を生きるために何を大事にするとよいのだろうか。

確かにこれらの多様な課題に答えることは必要であろう。しかし、教育に求められるものの中で、根本的に変わらず特に大事にすることがある。そのキーワードとなる一つが「生涯学習」であり、学ぶ楽しさを十分味わうことを通して、生涯学び続ける態度へつなげていくことであるとする。(中略)「教育は国家百年の計」である。学校教育は学校教育にとどまらず、その後の生涯教育に続いていくものとしてとらえられなければならない。そのために教

* 平成16年度岐阜大学大学院教育学研究科修了、平成17年度12年目研修教員

員は、ゴールを 1 年後や 2 年後といった極めて短いスパンではなく、さらにその先に見据えて教育活動に取り組むことが求められていくと考える。」

2 キャリアアップフィールドを受講して

私が受講したのは、総合的な学習のフィールド、野元世紀教授の「環境教育を行う上で何が必要か」である。実は環境教育と歴史教育には似たような側面があると思っているのだが、それは野元教授の書かれた講座内容の紹介文にも現れている。以下に引用してみる。

「環境教育はものの本質を見極めないと偏見やムードが先行する危険性をもっている。そのため教師は総合的な眼でものを見ていく必要がある。『焼畑』や『南アジアの人口密度』、『日本の森林面積率』などを題材に、そこにある本質を解説していく。(後略)」

略した部分については後でまた触れるが、「本質を見極めないと偏見やムードが先行する危険性」というのは歴史教育についてもまったく同じことが言える。なお、ここで私が「歴史学習」ではなく「歴史教育」と言っているのは、あくまで教える側の問題だと思っているからだ。こと「歴史教育」と「環境教育」以上に、専門家に対するリスペクトが薄い、もっとはっきり言ってしまえば素人があれこれとものを言いやすい分野が他にあるだろうか。最近テレビで占い師が日本の歴史と環境問題について、とめどなくしゃべっているのを見て暗澹たる気分になったが、おそらくこれと似たようなことはあちこちで起こっているに違いない。話が横にそれたが、以下、講義を受講して考えたことを自分の専門とかかわらせて何点か述べてみたいと思う。

①「熱帯アジアの人口密度とモンスーン」

この講義では、熱帯アジアに対するイメージが大きく変わった。従来、熱帯アジアの人口過密は、貧困や無知にもとづく人口増加によるものと説明されており、大変暗いイメージがつきまとっていた。しかし講義によれば「稲作は湿地性の植物を栽培作物にして、降水の集中する雨季の過剰な水に対処し、常習的に氾濫する広大な低地の利用を可能にした農業」であり、牧畜や畑作と違って継続的な農業生産が可能、つまり膨大な人口を養ってこられるだけの収穫が可能であったという面をもっているということが明らかになった。熱帯アジアのイメージを入学したての大学生に書かせたところ、上記のような負のイメージがほとんどだということであった。この大学生がもつ負のイメージという点については、それ以前の学校教育の責任が大きいと思われる。

これと似たようなことが言えるのは、歴史教育の中の「農民」のイメージである。岐阜県の平野部では地域教材として「水害と戦ってきた人々」を取り上げることがある。以前、ある先輩教員から聞いた話だが、その単元を終えて子どもに感想を書かせたところ、「せっかく作った米は水害で流されてしまって、なんて悲しい、かわいそうな生活だったのでしょ。私は家の農業の跡を継ぐことは絶対にしないと心に決めました。」という内容のものがあったそう。日本の農業は衰退の一途を辿っているが、この歴史教育の農業イメージ形成の罪は大きい。「水害と戦ってきた」ということは、そのままにしておけば遊水地でしかないような土地を切り開き、人々が知恵を絞って水田を作っていたことの証明である。「大変だった」「つらかった」「かわいそう」ではなく、むしろ御先祖のパイオニア精神に焦点を当てて語られるべきではないのか。大学院のとき、過去約 40 年間にさかのぼって小学校の社会科教科書を読んでみたが、「貧しく辛い江戸時

代の農民」というイメージを彷彿とさせる記述は少なくなってきた。しかし、教える側の教員の中に、そのイメージが形成されて凝り固まっているのであれば、それは教育の現場で再生産されていくに違いない。これを避けるためには、学問は常に進歩し続けていることを認識し、その最先端を知っておかなければならない。そのためにこそ12年目研修や大学院の講義は必要なのではないか。なお蛇足ながら付け足しておく、足利尊氏の肖像画と考えられていたものが実は別人であったとかなかったとか、そういった類のことは歴史教育の本質とは何のかかわりもないことだと私は考えている。なぜなら、足利尊氏の肖像画が本人であろうがなかろうが、実際に会ったことのある人間はこの世にいないのだから。むしろビジュアルなものに頼りすぎている教材研究への警鐘と受け止めるべきだと考える。

②スリランカ古代灌漑文明は何故滅びたか？

仮にも歴史学を専攻していながら、この講義に出席しなければ、スリランカの歴史について一生知ることはなかったかもしれない。しかし、考えてみればこれは不思議なことである。それは「学校」と名の付く場で30年近く過ごしてきて、スリランカの歴史に触れる場が全くなかったということの意味している。今、私の手元に『新講 世界史』（*1）という高校用参考書がある。私が高校の時はまだ世界史が必修でなく、世界史の知識が中学校で止まっていた。学部でも院でも困ることが多々あったため、恩師に相談したところ、下さったのがこの参考書である。（現在絶版のため購入不可）前文を少し引用してみる。

「世界史の再構成ということが、1960年代からかなりやかましくいわれてきた。再構成ということはいままでの世界史の叙述では不十分で、世界史を組み立てなおさなければならないということである。いままでの世界史の叙述の欠点のなかで、いろいろな人から指摘されていたことは、ヨーロッパ中心史観ということであった。わかりやすくいえば、ヨーロッパは古代のギリシャ・ローマの時代から民主的で、進んでおり、すぐれていて、アジア・アフリカは、みすぼらしくておくらしているような印象を諸君にあたえる叙述がおこなわれてきたということである。」（『新講世界史』p3 序章 世界史の構成について）

このようなヨーロッパ中心史観を克服しつつ、大国に抑圧された諸民族や小民族が主体的にどのような動きをしてきたか、世界史の中でどのような役割を果たしたかということについて、この本では4人の執筆者が情熱を傾けて書き綴っている。参考書と言うよりはスリリングな歴史小説を読んでいるような楽しさがあり、今読んでみてもまちがいに名著である。短大の教科書とか大学の一般教養用教科書としてかなり売れたそうだが、肝心の高校生の大学入試用としてはほとんど売れなかったということだ。しかしこの本の初版から30年近くたった今、残念ながら学校で教えられている世界史は、前述の引用文の後半に近いものがあるのではないかと思わざるを得ない。小学校6年生の社会科の教科書でも、北海道や沖縄の歴史が語られるようになってきたのは、また中央政府だけでなく地域の歴史に焦点が当てられるようになったのは、ようやくここ20年ほどである。もちろん、限られた時間の中で全てのことを網羅して学習するのは実際には不可能だ。しかし「誰の視点でものごとを考えるのか」を問い直す作業は、いつどんな学習をするに必要だと思う。私が修士論文を書くにあたって、初めは漠然と「女子教育はどのように行われてきたのか」ということを考えていた。ところが、裁縫教育をキーワードに史料を読んで

いくうちに、「女子はどのような教育を受けたいと願ひ、自ら学ぶための道を切り拓いていったのか」という視点に変化していった。史料を探す、読む、再構築するという作業が自分の視点を変えていくという経験は、おそらく修士論文を書かなければ得られなかったに違いない。その点から考えても、私にとって大学院教育と12年目研修はリンクしている。

③焼畑は悪か？

これまで環境教育で一般的に言われてきた「焼畑は無知の産物で、環境破壊の一部を担っている。」ということが、いかに偏ったものの見方であるか、真に環境破壊に加担しているのは何であるかという内容の講義があった。

小学校で現在一般的に行われている環境教育の一例をあげると、環境破壊、森林保護、自然保護、などだろうか。そしてそれらの環境教育に共通するキーワードは「まず自分たちでできることを考えよう。」である。空き缶のリサイクル、無駄遣いの見直し、ケナフの栽培……。私はこうした環境教育に今一つしっくりこないものをずっと感じていた。今回の講義でその正体がようやくはっきりしたように思う。ここから先は気が重いのだがあえて書く。もう20年近くも前に、朝日ジャーナル紙上に心理学者の小倉千加子氏が以下のような文章を載せていた。

— さて、女性にのみ関して言うならば、日本でエコロジー運動をやっている圧倒的多数は主婦である。(略)そして、エコロジー主婦の多くが高学歴なのである。夫を見ると、ホワイトカラーで、それも上場企業の管理職や専門職のエリート層が多い。つまり、日本の高度産業化を推し進めてきた当の近代的知の持ち主の妻が、ほかならぬ近代を非難する役割を演じているのだ。

市民運動は、まず余暇がなければできない。無農薬野菜は、裕福でないと買えない。「自然」を愛する人たちは、自分たちの生計を支えている夫が「自然」を否応なく破壊することに加担してくれているからこそ、エコロジーをやれる時間的、経済的自由を保障されているのだ。エコロジー運動は、日本では「生活保守」運動である。日本のエコロジー運動の弱みは、この一点にある。(＊2)】

「日本のエコロジー運動の弱み」は、残念なことに「環境教育の弱み」と言い換えることができる。もちろん、私は子どもたちの真摯な取り組みは非常に価値あるものだと思うし、それを否定する気はない。事実、上記のような環境教育を私も何回か行ったこともある。しかし自分たちが営み、豊かさと便利さを享受した近代生活は、どう言い繕っても環境破壊に荷担していることは事実である。その矛盾こそが小倉氏の言うところの「弱さ」だろう。その弱さを自覚しないまま、「まず自分たちでできることを考えよう。」と言っても、それを突き詰めていけば自分たちの生活そのものを否定することになるだけだ。論理的な基盤が脆弱な環境教育は、学校を卒業したら忘れ去られておしまいだろう。

講義で紹介された、雲南の焼き畑農業民の「われわれは土地を森から借りました。だからまた森に返します。」という言葉は強く印象に残った。アメリカ先住民の「我々の土地は先祖から受け継いだものでなく、子孫から借りたものだ。」という言葉には、大変心打たれる。でもこのような、サブシステムに基づいた謙虚な気持ちは、生産過程から切り離されたこの国では、もう大勢を占めることはないだろうと残念ながら思う。環境を守ることと今の自分たちの生活は大きな矛盾

を抱えている。その上で「自分たちにできること」を考えるとすれば、莫大なコストや労力がかかることを自覚するべきである。そのコストや労力を提示し、それを現在も将来にわたっても負担する覚悟があるか否かを問うことが、今の環境教育に欠けているのではないだろうか。

環境について考えると環境だけではなく経済の問題も密接にかかわってくる。そこが環境教育の難しさであり、学校教育で取り扱う中での限界でもあると思う。しかし、逆に大きな可能性ももっている。中学2年の国語の教科書に、松井やよりさんの「アジアで働く子どもたち」という教材がある。こうした教材にふれると、環境について考えることは、自然科学、社会科学、人文科学を融合させた、まさしく総合的な学習にふさわしいものなのではないかと思えてくる。今度、環境教育に取り組む際は、また違った視点から考え、扱ってみたいと思っている。

3 終わりに

環境教育と直接かかわりはないが、講義中の言葉で印象に残ったことがある。それは「教育の理想は青空教室である。」「教師は優れた語り部でなくてはならない。」という言葉である。この言葉は、私に、もう今は亡くなってしまったある先輩教員の言葉を思い起こさせた。「あの長くつらかった戦争が終わって、校舎を含む何もかもが焼けてしまって、私たちには何も残されていませんでした。子どもたちの教科書はもちろんのこと、黒板もない、机も椅子もない。それでも、青空の下で、先生と子どもたちが向き合って、時間を忘れて勉強した。日本の未来について語りあった。何もなくても、そこには明日への希望だけはありました。」私はこのときの授業は、今のどんな教材・教具を使った授業よりも、どんな最新のコンピュータで作ったコンテンツを使った授業よりも、素晴らしい授業であったに違いないと思っている。教員が熱い思いをもって子どもたちに語るべきことがあること、それはどれだけ教育技術が進もうと、素晴らしいコンピュータが導入されようとも、教育が「明日への希望」となるためには一番大切なことではないかと考える。そしてその思いはたしか知識と教養に裏打ちされたものでなくてはならない。

最後に、私なりに考えた12年目研修（広く大学院での研修も含む）の意義と課題を述べて終わりにしたい。大学院修士課程と12年目研修を終えて、その意義について改めて考えると、「それまで自分が持っていた価値観や常識を覆し、改めて再構築する」この一点に尽きるのではないかと思う。「2 キャリアアップフィールドを受講して」のはじめで述べた、野元教授の講義内容の文章の、略した部分はこのように続いている。「おそらく今までの正義と悪が逆転するのではないかと思う。この研修が今後の環境教育の教材開発などに役立つことを願っている。」この文章は、私たち現職教員にとってはきわめて挑戦的ですからある。「そして、その後あなたは どうするのか。」が問われているからだ。だから、大学院教育や12年目研修を受けた私たち現職教員が「ためになりました。」「大変勉強になりました。」というのは禁句だと思うし、もっと言えば敗北であるとさえ思う。ためになることや勉強になることなら、現場で経験すればよいことである。「講義は講義として分かったが、私はさらにこの点をもっと追及したい。」「私は逆にこのように考えるが、その点についてどうなのか。」せっかく大学院にまできたのなら、受講生の側はもっとアグレッシブになるべきだ。また受けてたつ大学の先生方も、現職教員を院生と同様に鍛えていただきたい。大学院時代に私が在籍した教科教育専攻また講義を受講した学校教育専攻では、「お客さん」の現職教員ではなく一院生として扱ってもらい、真摯に議論することができた。

それは貴重な経験だったと思う。まったく同じ経験が、もし12年目研修でできれば、こんなに素晴らしいことはない。大学院での研修が現職教員にとって「知の探求」「真理の追究」の場となり、それが子どもたちに還元される場が十二分に保障されることを心から願っている。

(* 1)『新講 世界史』 土井正興 片山誠二郎 堀越智 吉村徳蔵 共著
1976年 三省堂

環境教育雑感 一森の文化と環境教育一

すでに20年近くたつが、「我々は森から土地を借ります。だからまた返します」という中国雲南省の焼畑民の言葉に、今も感動を覚える。この言葉はまさに焼畑の本質を指していると思う。森林を伐採しても木が生き続けるように焼畑地には切り株が残されている。数年耕作して休閑期に入る。その間に、切り株から出た芽が成長し、やがて森林に戻っていく。焼畑地域が雲南省で最も森が豊かであることから、焼畑が自然に優しい森の文化であることを実感する。焼畑地の土壌を調べると、無数の炭が含まれている。年代測定から一番古い炭は2000年前のものであることが判明した。これは、この地で営々と焼畑が繰り返されてきたことを物語っている。焼畑では、火入れは必ず斜面上部で行う。斜面の下部に火をつけると、燃え広がり、火力をコントロールできなくなる可能性がある。一度に火入れする範囲も狭く、遠くから眺めると一筋の煙が焼畑地から上がっている。

数年前、ある企業のCMがテレビに流れていた。その内容は、パプア・ニューギニアの焼畑を止めさせるプロジェクトの紹介であった。天を焦がすような森林破壊の炎を背景に、「生きるために森を焼く人たちに、森を守ろう、という言葉は届かない。」で、このCMは結んでいた。このCMの問題点は、焼畑を野蛮なものと決めつけ、その野蛮さを強調するために、アマゾンの森林破壊やアメリカのプレーリーの野火の映像を用いたこと

である。焼畑に強すぎる火力は不要である。なぜなら根の部分まで焼失してしまい、木が焼け死んでしまう。自分の正義を貫くために視聴者に捏造した画像を送ってもいいのだろうか？そして、さらに「森を守ろう、という言葉は届かない。」と言葉で追い打ちをかける。このプロジェクトによって、長らく続いた森の文化が、この世から消えてしまうかもしれない。

残念ながら、このCMと同様の認識が教育の世界にも定着しているようだ。講義で、「焼畑は森の文化である。現代社会が模索している持続可能な世界がここにはある」と話すと、必ず学生から反論が出る。火入れは野蛮であり、二酸化炭素濃度の増加や森林面積の減少など、焼畑は地球環境に悪影響を与えていると学生は言う。その情報源を尋ねると、学校でその様に習ってきたと答える。地球上の炭素の循環や炭素収支の正確な数値を求めることは難しいが、多くの研究論文を総合すると、化石燃料の燃焼によって大気に放出される炭素量に対して、アマゾンなどの大規模な森林破壊に伴う放出炭素量はその30%程度である。一筋の煙にすぎない焼畑によって放出される炭素は、それより遙かに少ないはずである。二酸化炭素濃度増加に関して焼畑を批判するならば、まず我々の日常生活を大いに反省しなければならない。それから、焼畑は森がなければ成立しないことを認識すべきである。切り株を残すことでも判るように、

焼畑の本質は森の再生にある。森林面積を減少させない点でも焼畑は画期的である。1997年に出版されたある教育関係の雑誌に、「熱帯林 — 森に学ぶ環境学習 —」というタイトルの一文が掲載されていた。「地元住民に木を守る意志がほとんどない。」、あるいは焼畑を、「森林を破壊することによって生きてきた文化」という内容にはショックを受けた。アマゾンなどに見られるような、森林の皆伐を目指した森林破壊にも火入れを行う。しかし焼畑とは対極をなすものである。その区別すらできていない。「現在大規模な森林破壊が進行している。その様な現状の中、一方で森の文化も残っている。」焼畑はこのように評価されるべきである。

以前、ある中学校の研究授業に出席した。西アフリカをテーマにした授業は、平均寿命の低さをキーワードにし、低教育水準、不衛生、貧困などに関する内容であった。「これでは生徒は西アフリカを暗黒の世界としか認識しないであろう。何故、この地域で一生懸命生きていく人々の姿を示さないのか」が、このときの感想である。「焼畑＝野蛮なもの」という認識も、このような授業と関係しているのかもしれない。経済的指標をもとに、国家や地域の優劣を決め、それは、地域の自然と人間の関わり（文化）の価値をも左右する風潮は、教育の世界にも強くあるようである。各地域の文化は、長い時間の流れの中で、その風土に培われてできあがったものである。それぞれの文化の尊さを理解していきたい。蛇足ながら、色眼鏡をはずし、各地域の見事な自然と人間の関わりを理解していくことこそ国際理解教育の原点であるとも思う。

話は変わるが、日本の人口密度は1平方キロあたり338人である。30万平方キロ以上の国土を有する国家では、最も高い値になっている。にもかかわらず、国土の66%

が森林におおわれ、森林面積率は世界第3位の高さである。人口稠密国家でありながら高い森林面積率を維持する事例は、世界に類がない。何故日本の山は緑なのだろう？学生にこの問題を尋ねると、必ず熱帯の森林破壊、すなわち「森くい虫の日本」という返事が返ってくる。かつて地中海沿岸地域は照葉樹（硬葉樹の系統で日本のものとは異なる）の森に覆われていた。その北には落葉広葉樹の森が広がっていた。その大半が消えてしまっている。一方、日本は長い間、森が消えずにきた。「何故緑か」を考える上で、この点が重要である。縄文時代のブナ林文化を調べてみよう。弥生の照葉樹林文化も調べてみよう。1万年におよぶ日本人と森との関わりが見えてくる。表層的なある局面でのものごとの完結ではなく、その奥にあるものを探り出してみる。そうすると、見事な日本の「環境史、文化史」が出現するはずである。

環境とは、幅の広い概念である。したがって、環境教育も多岐にわたると思う。しかし、森の文化の真の姿を理解するようになったら、新しい見方で様々な環境教育を実践することができるのではないかと考えている。

12年目研修では、まず簡単な気象の理論を用いて、世界各地の気候風土の形成の仕組みを説明し、次に各地域の自然と人間の関わりかた（文化）を吟味する。最後に、現代社会が作り出した破壊的な地球環境問題を通して、地域の文化の価値を再考することを行っている。今まで何人もの方が研修に参加したが、果たして何らかの影響を与えることができたかどうかは判らない。そこで、研修生だった岐阜市立岩小学校の竹川里佐子教諭に、率直な意見、感想、研修後の意識などを書いていただいた。前半の文章は、竹川教諭のオリジナルなものであり、一切の加筆修正は行っていない。